

平良地区救護所

平良村保健婦 中西タマヨさん
明治44年生 当時34歳

うわ言で叫ぶ母を呼ぶ声

朝礼が済んで外に出たら大きな雲が出ていたので、何ごとかあったと思いました。11時ごろ、廿日市駅に行ったら、ひどいやけどをした人がたくさん降ろされたんです。その数は分かりません。その日、大竹の人が広島市の建物疎開の当番の日だったんです。廿日市の駅に降りたのはこの人たちだったと思います。

駅で治療するときは、農協から食用油一斗缶で一缶、持ってきてもらったんですよ。それから、婦人会に衛生材料（包帯やガーゼなど）を持ってきてもらいました。処置といってもしよ

うがないんです。かすりの着物を着ている人は、黒いところが焼けて白いところだけ残っているような状態ですから。男女の区別はつかないんですよ。とにかく真っ黒で、焼けているのがひどかったですね。女はかすりの上下（下はモンペ）、男は黒の国防（深い緑）色の服を着ておられたから。やけどを表に受けた人は背中がよくて、背中を受けた人は全身真っ黒でね。廿

日市の駅に降りたときは着物がボロボロになっていましたね。

患者さんを廿日市国民学校（廿日市小学校）にどんどん送ったら、講堂がいっぱいだったので今度はどこに送ろうかということになり、平良に送ったんです。義勇隊の方がたくさん出ていてその作業をしていました。夕方になって役場に帰り、それから役場と学校にいっぱいになった避難者の救護活動に入りました。

20時ごろだったかしら、もう暗かったんですが、「15人ほど受け入れてもらえないか」と連絡があつて、「どこに入れようか、村長室だったら空いているが：」というんで受け入れたんです。学生で、来たときは元気でトラックから飛び降りたのに夜中から熱が起きてね、もううわ言ですよ。

その学生が親を呼ぶんですが、「おかあさん、お菓子ちょうだい」と言つて、甘えてきてね。それから「うーうーうー」とうなり声と叫び声。「君が代」を歌われるのはびっくりしました。こちらの人が歌えばこちらの方が一緒に歌われるんだから、涙が出る。あの人たちみんな死なれました。数日経ってから、たった一人お父さんが迎えに来

串戸地区救護所

宮内村職員 坂本敏江さん
大正7年生 当時27歳

無我夢中の献身的な奉仕

串戸の救護所は、2カ所あったように思うんです。増井重吉さん（警防団団長）の2階建ての倉庫と串戸木材の事務所、事務用具を借りて3人ぐらいで面接して受付名簿を書きました。人が足りないので、農業会の串戸支所から2人応援に来てもらったんです。

宮内は、以前から天満町（広島市）の受け入れに当たることが決まっていたんですが、串戸に救護所を作ることは急ぎよ決まったようでした。

15時か16時ごろ受け付けに行っていたんですが、もうたくさん寝ておられました。後からあとから詰めかけられるんです。大八車で運ばれてくる人もありました。みんなようやくたどり着いたというふうで、虫の息のような人が下に転がっており、足の踏み場もない状態でした。

「住所、名前、生年月日、男女は」と言つても、答えられる人は良い方で、答えることもできず倒れ込む人も大勢で、何人か見当もたたんかったんです。こちらにも、見どころか書くのが精いっぱいでした。

皆、一様に「水をくれ、水をください」といわれるが、「水を飲ませたら死ぬからいけん」と初めは飲まなかったんです。しまいには、どうせ死ぬならということ、真ん中にバケツを置き、杓（しやく）飲みになりました。水を飲むとバタッと倒れられ次々に死なれました。

被災者の様子は、髪は焼けて無く、顔が紫色に腫れ上がり、まぶたは垂れ下がって目が見えないようになっていました。土間には棒を転がしているようでとても人間とは思えん真っ黒な人が寝ているんです。皮ふも顔も、当たり前の人は一人もおられん。性別も分からず、服も焼けて裸でくる人も多かったです。乳房が紡錘形にそっくりめぐり取られた人もおられました。

一番気の毒だったのは、真っ黒な顔で分からないがたぶん女の子の人だったでしょう。焼け残ったボロボロの自分の着物を背中から腹に向けて結び、中に赤ちゃんを包んで大八車を四つん

残されたメッセージ

—被爆者救護活動の記録—

て身元が分かっていた他は、全部亡くなられたんです。かわいそうだったんですよ。

たしか（学校では）300人くらい被爆者がいたように記憶しています。朝、学校に来てま

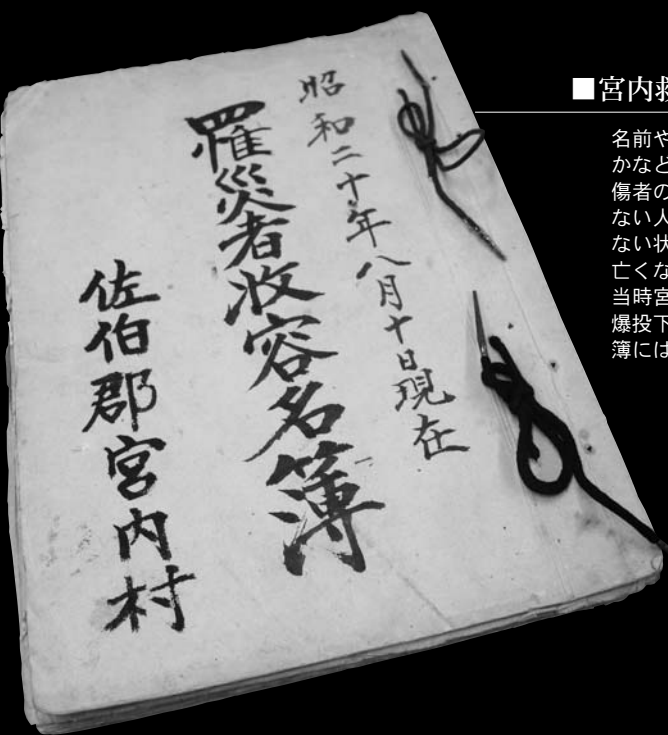
ずやることは死なれた方の死体を役場の上に運んで焼くことでした。それから膿（うみ）がいっぱい付いたものを速谷川で洗濯して消毒。とにかく傷の中にガラスの破片がものすごく入っていて、

這いに引いてこられたが、救護所の2階に上げるまでに力尽きて親子とも息を引き取られました。思い出したくないが、今も忘れることができません。思い出すとぞっとします。

警防団が動員され、倉庫の2階へ被災者を抱えて上がられ看護されました。団長さんは率先して救護に当たられ、よくやられました。また、団員さんも死亡者を背中におんぶして倉庫の2階から下に降ろす仕事をやら

れました。みんな無我夢中で、献身的に奉仕されました。夜も次々来られるので、私どもも朝まで徹夜で受け入れ名簿を書きました。一方で、外見はけがのない人でもその夜のうちにバタバタ死なれるので、名簿の死亡者欄に赤線で消す作業が加わってきました。

死亡者は、沖の新開地にあった串戸火葬場に運びました。でもここだけではとても間に合わず、畑の中にも穴を掘ってそこで火葬にしました。



■宮内救護所の罹患者収容名簿

名前や年齢、住所のほか、重傷か軽傷かなどが記載されていた。しかし、重傷者のなかには名前以外記載されていない人もいた。それは話すことができない状態にあったためか話を聞く前に亡くなったためかは分からない。当時宮内村は天満町の疎開先として原爆投下前から指定されていたため、名簿には被災者は天満町にいた人が多い。

→昭和20年になると大都市へのじゅうたん爆撃が現実のものとなってきた。廿日市の旧町村は、広島市内が爆撃を受けた場合の疎開先として担当の区域が割り当てられていた。

記録は物語る

■指定避難先一覧

※廿日市町史より

旧村名	広島市内の町名
観音町（佐方）	大手町6～9丁目 国泰寺町 雑魚場町
廿日市町	千田町一円 平野町 南竹屋町
平良・原村	中島本町 中島新町 天神町 材木町 木挽町 元柳町 水主町一円 吉島町一円
宮内村	天満町一円 中広町一円
地御前村	観音一円 昭和新開

原爆投下から40年目の昭和60年。当時の廿日市では各地区の救護所の記録を残そうと証言を基に一冊の本を編集した。被爆の惨状が広島市を中心に語られることが多い中、廿日市では何が起ころりどう行動したのか。身振り手振りとその口を通じて惨状を再現された記録。この本には、当時を知る64人の証言が収録されている。

※熱い波より2つの救護所の証言を抜粋。流れを理



昭和61年7月10日発行
発行／廿日市町教育委員会